

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



ミラノ展

——都市の芸術と歴史——

Topics

- 特集 ミラノ展
江戸絵画のたのしみ
スイス展 リアルワールドー現実世界
連載 ボランティア日和／展示室で考える

ミラノ展

——都市の芸術と歴史——

開館10周年を迎えて

この秋は、新しい美術館、博物館が華々しく開館しました。福岡県太宰府市には九州国立博物館、広島県大野町には王舎城美術宝物館がリニューアルして「海の見える杜美術館」、そして東京日本橋には三井記念美術館が、それぞれオープンして活動を開始しています。このところ何かと元気のないミュージアム界ですが、新しい仲間を加えて活気が出てくることを願っています。

千葉市美術館も来る11月3日に開館10周年を迎えることになります。この間に展開してきた様々な活動は、当館の基礎的な体力となって、今後のより成熟した展開を支えていくことになると確信しています。

さて、10周年を記念する特別展として、「ミラノ展」を実現する運びとなりました。イタリアでローマとならぶ大都市のミラノが、市内の美術館、博物館16館から、同市の歴史と文化を伝える代表的な美術品を拠出してくれた、願ってもない特別展観となりました。なぜにミラノ市がこれほどの好意を千葉市と千葉市美術館に寄せてくれたかについて、おそらく疑問に思われる向きもあることでしょう。実は、両市の間には、これまでにつちかってきた親密な友好関係が存在していたのです。

ミラノの中心に大聖堂がありますが、その広場に面してパラッツォ・レアーレ(直訳すると「王宮」)という名の展示場があります。そこで、1999年から2000年にかけて「北斎 画狂老人」展、2004年に「浮世絵 浮世」展が開催されました。いずれも、イタリア国内ばかりでなく、欧米から多数の観客を集めて大成功をおさめたものでした。



ジョヴァンニ・セガンティーニ《水飲み場のアルプスの雌牛》ミラノ市立近代美術館蔵



ロレンツォ・ロット《若者の肖像》スフォルツァ城市立博物館、絵画館蔵

これら二つの展覧会は、ミラノ市に国際北斎研究所を設けて活発な活動を展開しているジャン・カルロ・カルツァ教授の監修になるものでした。カルツァ教授とは旧知の関係にある辻惟雄前館長と浅野秀剛学芸課長、それに私の3人は、千葉市美術館を通じて積極的に協力したのでした。そのことを深く恩義に感じてくれたの、ミラノ市の好意あふれる返礼となったのがこの「ミラノ」展なのです。

ミラノといえば、ファッションに関心のある方にはミラノ・コレクションで、音楽に興味のある方はオペラの殿堂スカラ座で、以前から親しんでこられたことでしょう。私のような美術ファンは、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画「最後の晩餐」、そしてミケランジェロが死の直前まで手を加えていた未完の彫刻「ロンダニーニのピエタ」で代表される、美術の町として承知しています。その美の都から、絵画、彫刻、工芸の名作多数を友好親善の使節としてお迎えし、開館10周年を華々しく祝えることに對して、無上の喜びと感謝の念を抱いているところです。

何ごとも時を重ねるということがもたらす成果には大きなものがあります。当館も10年を経過した今、市内、国内はもとよりのこと、海外の個人や美術館、博物館からも甚大な好意と支援とを寄せていただけるようになりました。そうした目には見えない、耳に聞こえない励ましを力として、次の10年に向けて一步一步、着実に歩を進めていきたいと思っています。今後ともかわらぬ友情と愛情を当千葉市美術館にお寄せ下さいますよう、心からお願い申し上げます。

館長 小林 忠

芸術都市ミラノに接した日本人画家

北イタリアの中心都市、ミラノには日本からの直行便もあり、ファッション・デザイン関係をはじめとするビジネスに、イタリア旅行の入り口として最後の晚餐やドゥオーモの観光に、イタリアン・ブランドのショッピングに、また留学に、様々な目的を持って多くの日本人が訪れています。

明治以降ヨーロッパを訪れた芸術家たちはパリを目指すことが多かったのですが、遠くヨーロッパまで来たのだからと、イタリアへ足を伸ばしミラノを訪れることも珍しくありませんでした。今回の「ミラノ展 都市の芸術と歴史」では素晴らしい美術館・博物館に恵まれた芸術都市ミラノの魅力を紹介していますが、それを先取りした画家たちの事例をご紹介します。

1 友人の絵葉書 — 『パンテオン会雑誌』

1900年万国博覧会が幕を閉じたばかりのパリでオテル・スフローを拠点にして日本人留学生の親睦組織「パンテオン会」が結成されました。提案者黒田清輝をはじめとして岡田三郎助、和田英作ら洋画家が約半数を占めていましたが、日本画家では竹内棲鳳、久保田米斎、その他様々な分野の留学生が参加していました。このパンテオン会では、会員の文章・絵画を集めて手づくりの回覧雑誌を作っており、三冊が発行されました（『パンテオン会雑誌』研究会編「パリ1900年・日本人留学生の交遊『パンテオン会雑誌』資料と研究」ブリュッケ・2004）。



レオナルド・ダ・ヴィンチおよびロンバルディア地方の画家《キリストの頭部》ブレラ美術館蔵

1901年9月に発行された『パンテオン会雑誌』11号には、当時法学を学んでいて、後に実業家となる渡辺千冬(1876～1940)がイタリア・ミラノから出した2枚の絵葉書が含まれています。1枚目はドゥオーモで、2枚目は今回の展覧会に出品されているレオナルド・ダ・ヴィンチおよびロンバルディア地方の画家《キリストの頭部》(ブレラ

美術館)の絵葉書です。これは雑誌を編集していた樋口次郎(1871～1917)に当てて送られたものですが、差出人のサインがあるだけでメッセージは書かれていません。同じ雑誌には岡田三郎助(1869～1939)の表紙絵、和田英作(1874～1959)や中村不折(1866～1943)の小品も含まれています。パンテオン会の画家たちもレオナルドの絵葉書を当然見たでしょう(なお『パンテオン会雑誌』11号に本展出品作の絵葉書があることは児島薫さんのご教示により知りました)。



ベルナルディーノ・ルイーニ《ハムの嘲笑》ブレラ美術館蔵

2 岩佐又兵衛とベルナルディーノ・ルイーニ — 土田麦僊

西洋絵画に興味関心を抱いていた日本画家土田麦僊(1887～1936)は大正10(1921)年パリに向けて旅立ちました。翌大正11(1922)年1月～2月、麦僊はイタリアを旅します。

ヨーロッパ滞在中、麦僊は本展覧会に《ハムの嘲笑》(ブレラ美術館)が出品されているベルナルディーノ・ルイーニの作品に惹かれ、ルイーニを「自分の神」と感じ「自分は日本に帰ったら又兵衛とルイーニを合した様なものを描きたい」と大正11年2月の弟土田杏村宛の手紙に述べています。麦僊が取り入れようとしたのは、本展でいえばブラマンティーノ《我に触れるなかれ(ノリ・メ・タンゲレ)》(スフォルツァ城市立博物館、絵画館)やマルコ・ドッジオーノ《カナの婚礼》(ブレラ美術館)のようなフレスコ画でした。



ブラマンティーノ《我に触れるなかれ(ノリ・メ・タンゲレ)》スフォルツァ城市立博物館、絵画館蔵

大正11年2月の妻宛の手紙によれば「自分の最も期待しているルイーニのあるブレラ画堂に行く」とあり、ルイーニがお目当てだった麦僊ですが、本展出品作のレオナルド・ダ・ヴィンチおよびロンバルディア地方の画家《キリストの頭部》(ブレラ美術館)も見ていました。「ミュゼエにはゴツソリの小品 及ラファエルの傑作よく見るピンチの最後の晚餐のデッサン及ルイーニのフレスコ一枚と油絵を見たのみであとは二十室から閉めて居るといふ」と記しているのもそれなりに印象に残ったのでしょう。手紙からはとにかくルイーニに心惹かれていることが伝わります。ミラノに残るレオナルド本人の作品は少なく、現在ミラノの美術館を訪ねても、レオナルド自身よりルイーニをはじめとする周辺の作品に多く接することになります。ましてやパリのルーブル美術館ですでにルイーニに魅せられて(本人談)、それを楽しみにミラノを訪れた麦僊はルイーニ三昧でとても満足したようです。とはいっても「それからサンタ・マリア・デラ・グラチエに行ってピンチの最後の晚餐を見たが剥落して居る為予期通り感心しない」と《最後の晚餐》は一応見て、「午後ムセオ・カステロ・スフォルザに行くここではタピイのいいものがある」と記しているのも、スフォルツァ城市立博物館も訪ねたのでしょう。アンブロジーアーナ図書館へも行って『アトランティコ手稿』のレオナルドのデッサンも見たようです(手紙については東京国立近代美術館編「土田麦僊展」図録、1997、日本経済新聞社から引用しました。また同図録と合わせて群馬県立近代美術館編「旅と画家 近現代日本画家のみたもの」展図録、2003、群馬県立近代美術館を参照しました。)

3 ミラノに未来派を訪ねる ― 東郷青児

今回の展覧会はレオナルドとその周辺に重点をおく一方、ウンベルト・ボッチョーニ「《過ぎ行くものたち》のための習作」(ミラノ市立現代美術館)、アキッレ・フーニ《市電から降りる男》(ミラノ市立現代美術館)など未来派を含む20世紀の美術についても興味深い作品を展示しています。

イタリア未来派はほとんどリアルタイムで当時の日本に紹介され、1913年頃には萬鉄五郎がその画風を取り入れています。また1920年代には村山知義ら「日本未来派」というべきグループも存在しました。

東郷青児(1897～1978)は1921年からパリでイタリア未来派の中心人物である文学者マリネッティに接触し、同年ミラノへ旅した際もマリネッティに会っています。翌1922年にはイタリアで未来派の宣伝運動に参加し、ボローニャとトリノで開かれた展覧会にも出品しています(東郷青児と未来派については五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』、スカイデア、1995によりました)。

同じ年にミラノを訪れていても土田麦僊はベルナルディーノ・ルイーニを追いかけ、東郷青児は未来派に参加していました。街並に中世の名残を残しながら最新流行ファッションを発信する、古い歴史と最先端の現在が同居するミラノにふさわしいエピソードといえるかもしれません。次は皆様ご自身が多面的な芸術都市ミラノを体感なさるようお願いしております。

学芸員 伊藤紫織

ミラノ展 - 都市と芸術の歴史 -

2005年(平成17)10月25日(火) - 2005年(平成17)12月4日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 1000(800)円

高・大学生 700(560)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金



ウンベルト・ボッチョーニ「《過ぎ行くものたち》のための習作」ミラノ市立現代美術館蔵



アキッレ・フーニ《市電から降りる男》ミラノ市立現代美術館蔵

*** ミラノ展関連イベント ***

記念講演会

11月12日(土) 午後2時より

講師 = 小佐野重利(東京大学教授)

演題「ヴィスコンティ公爵家およびスフォルツァ公爵家のミラノ美術
- ジョヴァンニ・デ・グラッシからレオナルド・ダ・ヴィンチまで -」

* 美術館11階講堂にて 先着150人 聴講無料

トークイベント

11月27日(日) 午後2時より

出演 = ダリオ・ポニッスイ(俳優・演出家)

NHKイタリア語講座などでおなじみのダリオさんが、音楽を交えて
北イタリアの文化を紹介します。

* 美術館11階講堂にて 先着150人 入場無料

レクチャー

10月26日(水) 午後3時~ / 12月3日(土) 午後2時~

新保淳乃(川村学園女子大学・千葉大学非常勤講師)

11月16日(水) 午後3時~ / 11月26日(土) 午後2時~

/ 11月30日(水) 午後3時~

当館学芸員

より専門的な内容をご希望の方は新保講師のレクチャーにご参加ください。

* 美術館11階講堂にて 先着150人 入場無料

イタリアワインの夕べ

11月11日(金)、11月25日(金) 午後5時~

ミラノ展見学とイタリアワインとイタリア料理のコースをご用意しております。

* 定員：各回8人(多数の場合抽選) 参加費：5,000円

* 申込：各開催日の7日前必着。往復はがきに、住所、氏名、希望日、参加
人数、電話番号、返信用の宛先を明記して、下記へお送り下さい。

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館ワイン係へ。

イタリア映画上映会

ヴィスコンティとタヴィアーニ兄弟(共催：イタリア文化会館)

11月19日(土)

午後1時~「サン ロレンツォの夜」(1982年、伊)

監督：パオロ・タヴィアーニ / ヴィットリオ・タヴィアーニ

午後3時~「夏の嵐」(1954年、伊)

監督：ルキノ・ヴィスコンティ

11月20日(日)

午前11時~「父 パードレ・パドロネ」(1977年、伊)

監督：パオロ・タヴィアーニ / ヴィットリオ・タヴィアーニ

午後2時~「家族の肖像」(1974年、伊・仏)

監督：ルキノ・ヴィスコンティ

うち2作品については別日程でも上映します。

「夏の嵐」 10月29日(土)・11月13日(日) 午後2時~

「家族の肖像」 11月6日(日) 12月4日(日) 午後2時~

* 美術館11階講堂にて 先着150人 入場無料

アフタヌーンコンサート~イタリア音楽の調べ~

11月19日(土) 午後12時~ 東京フィルハーモニー交響楽団

出演 = ヴァイオリン：三浦章弘 / 藤村政芳

ビオラ：高平純 チェロ：服部誠

曲目 ヴォルフ / イタリアンセレナード

ヴェルディ / 弦楽四重奏曲 水短調

* 美術館1階さや堂ホール 先着150人 入場無料

ギャラリートーク

毎週水曜日 午後2時より 会場入口にお集まりください。

ボランティア日和

episode 8

趣味の一つで制作活動をしているということもあって、私自身よく美術館や画廊に足を運びます。鑑賞は表現に連鎖していて、自分の表現したいテーマや方向性が見つかり、表現の幅が広がったり制作のヒントにもなったりします。歴史的に価値付けられていない一般の作家の作品の前で、思わずフリーズしてしまうほどの感動体験をしたり、作家達が知恵をしぼって実現したであろう作品にイマジネーションがどんどん膨らみ、今まで見えなかったものが見えてきたり、心にひっかかったりもします。要するに自分のフィーリングに合うかどうかという形で自由に美術作品を楽しんでいただければいいと思っているのです。

相手によって柔軟に対応できるトークが、今の自分の課題だと思っています。来館者から教えられることも多くあり、素晴らしい人々との出会いが私の豊かな心の財産になっています。

美術館は今、教育・普及にも力を入れていますが、子ども達の鑑賞は、一枚の絵をじっくり見てもらい自分で考え、自由に発言できる体験を通して、人は同じ物を見ても様々な物の見方、感じ方、考え方があり、その違いや良さに気付き、他の人の価値

美術館でお客をお迎えするボランティアーズは、自身、最も積極的な美術館の利用者でもあります。今回は中田さんがボランティアの目で見えた美術館を語っていただきました。

値観を否定しないことを学ぶ一つの機会でもあると思っています。視覚は美術品を数多く見ることによって磨かれ、鍛えられると言われていています。何はともあれ、美術館に足をお運びください。何よりも今、展覧会が来館者の積極的な参加を求めるものになってきており、ワークショップや美術講座、講演会、映画会などの催し物、ギャラリートークなどを通して、美術に接する「行為」の機会をたくさん作りだしてくれています。

気軽に入りやすい美術館、市民の美術館として、これから市民がどう関わっていくのか。市民の希望や意見を美術館のマネジメントにどのように反映させていくのか。文化の香りを絶やさない為にも、市民みんなの手で文化の創造発信の拠点としての美術館を守り支えていきましょう。

斯く言う私も、これからは一層ポスター貼りなど、普及活動に力を入れていきたいと思っています。アートを身近に感じ、親しみをもって何かを受けとめていただき、帰り道が嬉しくなるような、そんな体験をしていただける出会いを目指していきたいと思っています。

千葉市美術館ボランティア 中田ふみえ

江戸絵画のたのしみ

千葉市美術館は、江戸時代の絵画と版画の収集と紹介を活動の柱の一つとしています。全国の公立美術館のなかでも珍しいこの特色を生かし、開館以来、この分野の大規模な企画展や所蔵作品を中心としたテーマ展を数多く開催してまいりました。このたびの開館10周年記念特別展である「ミラノ展」もそうした活動の縁によって開催の運びとなったものです。そこで同時開催として、当館の江戸時代の絵画のコレクションと、近年新たにご寄託を受けた作品の一部をご紹介します。展覧会を企画いたしました。

「筆墨の技を味わう」「月光に心研ぎ澄ます」「愉快な動物たち」など、いくつかのテーマによるコーナーを設け、画家の流派や制作時期にあまりとらわれず、たのしくご覧いただけるように構成してみました。では、それぞれのコーナーをご紹介します。

はじめに「いろいろな形」として、江戸時代絵画の姿のさまざまをご覧ください。例えば、伝統的な形式である掛軸。どんな形の画面でもくるくると巻き取ってコンパクトに収納できるという便利なかたちです。極端に縦に細長い長方形の画面が多くなるのも特徴ですが、下の方に絵を描いて上部には詩などを添える空間をあけたり、風景の近い方から遠い方へ下から順に描くなど、形に則した絵画が描かれ、それを鑑賞する暗黙の了解がありました。この掛軸や画帖(アルバム)

のような「作品」らしい形態のほか、道具や建具など、生活空間をたのしく彩っていた、これら用途あるものの絵の姿をご覧ください。

次の「筆墨の技を味わう」のコーナーでは、画家が筆づかいの腕を鍛え、墨や色の効果に細心の注意を払い、時には見る者をあっと言わせる工夫を凝らして仕上げた作品の数々を、その筆の跡を追い、技法の謎解きにもご参加いただくつもりでじっくりとご鑑賞ください。

この展覧会では、美術館の活動を紹介する趣旨も込めて、近年新たにご寄託を受けた未紹介の作品を各コーナーに多数展示しています。寄託とは、個人のご所蔵品を審査の上お預かりし、美術館の所蔵品と同様に保管し活用させていただく制度で、美術館の活動をより幅広く豊かにして下さるものです。次のコーナーでは「コレクションのよろこび」として、個人の愛好家の絵に対する熱い想いを代弁しているような、趣味が色濃く現れた寄託作品をご紹介します。美術館の広い会場での展示を念頭に置く収集では躊躇しがちな、個人コレクションならではの醍醐味、小さな、まさに目の中に入れても痛くなさそうな珠玉の作品を、手に取るような気持ちでご覧いただければと思います。普段はあまり展示できない、素敵な収納グッズの「いい仕事」ぶりもあわせてご覧いただき、歴代の収集家たちが感じたコレクションのよろこびを追随してみてください。

そして、次の三つのコーナーでは、江戸時代の人々が絵画のテーマとして愛した傾向を所蔵品の中から取り上げてみました。一つは「身の回りの小さな情景を描く」。小さきものたち、日常の中のさ



土佐光起《豆鳥図》寄託作品

さやかな情景、身の回りの自然や気象のかすかな変化、そんなテーマが時には屏風のような大きな画面にさえ描かれたことは、江戸時代の、そして日本の絵画の一つの特徴に違いありません。また、闇夜を明るく照らす月に寄せた想いは、芸術の各

分野の表現に発揮されてきましたが、「月光に心研ぎ澄ます」のコーナーでは、これを印象的にとらえた名品をご堪能ください。そして、最後の一部屋は「愉快な動物たち」として、けものや鳥たちが競演します。画家が実際に目にしているのかわからず、昔の絵には今想像する以上に動物たちの姿がたくさん描かれ、表現も様々です。そのこと自体とても愉快な気持ちにさせられるのですが、ご覧になった皆様はいかがでしょう。

7階の会場で、ローマ帝国時代以来の幅広いイタリア美術に触れた後は、是非ひと休み。



谷文晁《月に芦図》

8階展示室にもお立ち寄りのうえ、本邦の絵画の肩肘張らないささやかな世界に心遊ばせていただければ幸いです。

学芸員 松尾知子

江戸絵画のたのしみ

2005年(平成17)10月25日(火) - 2005年(平成17)12月4日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 200(160)円

高・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

*()内は団体30人以上の料金

* 「ミラノ展」の入場券をお持ちの方は無料です。



シルヴィー・フルーリ ギャラリーサイド2での展示 2005

みなさんスイスと聞くと何を思い出しますか。「アルプスの少女ハイジ」の舞台となったアルプスの山々や美しい湖に代表される、観光地としての姿を思い浮かべる方が多いはず。あるいは、時計をはじめとする精密機械産業や、プライベートバンキングで知られる銀行業を連想するかもしれません。それでは、スイス人アーティストと聞くと誰を思い浮かべるでしょうか。奇想の画家ハインリッヒ・フュースリを除くと、近代以前のスイス人画家の名を知る人はまずいないでしょう。近代以降では、ホドラー、ヴァロットン、クレー、ル・コルビュジェ、ジャコメッティ、ティンゲリーなど、西洋美術史に名を残した人々の名前が挙がると思います。けれどもこれらのアーティストの大半は、パリやミュンヘンなどスイス国外で起こった美術運動の一員として活動していたため、私たち日本人にとって、彼らがスイス人であることを意識する機会は少ないかもしれません。それどころか、彼らをフランスやドイツのアーティストと思い込んでいる方もいるのではないのでしょうか。スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語という4つの言語圏に分かれています。20世紀中頃までは、自らが属する言語の文化的中心地、すなわちフランスやドイツやイタリアに定住して制作活動を行うスイス人アーティストが多かったのです。

しかし近年、世界を舞台に活躍するスイス人アーティストの数は確実に増えつつあります。アートが以前にも増して国際化し、パリやニューヨークの地位が相対的に低下する中、もはやスイスは文化的周辺地域ではありません。通信や交通が発達した現在、チューリッヒとパリのあいだには、かつてのような情報格差は存在しないのです。

18世紀までは傭兵業を主産業とする都市国家連合体であったため、スイスは、西ヨーロッパの中では近代以前の文化遺産が少ない国です。最も有力な文化遺産が古城であることが、交通の要衝にある軍事国家というこの国の歴史を物語ります。このためスイスでは、他のヨーロッパ諸国に比べ相対的に近代以降の美術の地位が高く、一方で国民の所得水準も非常に高いため、現代美術は比較的恵まれた環境に置かれています。国外で展覧会を行うアーティストに対する助成も盛んで、これが近年、国際的に活躍するスイス人アーティストが増加する原動力となっています。またバーゼルではヨーロッパ随一と呼ばれるアートフェアも開かれ、チューリッヒには国際的に活動する有力な商業ギャラリーがあることも見逃せません。



モゼール&シュヴィンガー 《抑留区域》 2002

近年スイスでは、日常生活で見慣れたオブジェやモチーフを作品に引用しつつ、それらの裏側に隠された事

実を白日の下に曝そうと試みるアーティストが注目を集めています。私たちの周りにある日頃慣れ親しんでいる事物が、時として思わぬ意味を持ち、私たちを抑圧するシステムの一部となることを彼らの作品は明らかにします。

例えばシルヴィー・フルーリは、高級ブランド品のもつ豪華さを誇張して表現することで、美しくもグロテスクなインスタレーションを制作します。またファブリス・シージは、緊急避難用エアバッグやテントなどの不穏なオブジェでインスタレーションを構成し、それらを含む社会システムの意味を探ります。イランからの移民シャリヤー・ナシャットは、ルーブル美術館にあるルーベンスの《マリイ・ド・メディシスの生涯》を扱ったビデオ・アートによって、西洋文化と自らの複雑な関係を再検討します。彼らの作品を通して、観光地としての表層的なイメージの裏側にある、スイスの生きた文化状況の一端を日本の方々に紹介することができればと考えています。

また本展覧会は、日本で紹介されたことのない有力アーティストによって構成されています。フルーリとウーゴ・ロンディノーネは、国際的に非常に高い評価を受け、海外の一流美術館で幾度も個展を開いていますが、日本の美術館ではまだ作品を展示したことがありません。ファブリス・シージも現在国際的に注目を浴びつつあり、スイスとカリフォルニアの美術館で2つの個展を同時に開催中です。シャリヤー・ナシャットとモゼール&シュヴィンガーは、それぞれ最新のヴェネツィア・ビエンナーレとサンパウロ・ビエンナーレのスイス館代表に選ばれた若手の注目株です。

近年、現代美術の世界では、絵画や彫刻の占める地位が以前に比べて著しく低下しています。今回の出品作品も全て、インスタレーションとビデオ・アートという1960年代以降に登場した新しい芸術形式で作られています。伝統的な絵画や彫刻が、作品と向き合ってその美を鑑賞するのに対し、これらの新しいタイプの作品の受容は、作品を体験しながら、作品について考える事が主眼となります。みなさんもぜひ、スイス発の新しいアートを体験してみてください。きっと新しい驚きや発見があるはずです。

学芸員 水沼啓和

「ダイナミック・スイス」(日本におけるスイス年)関連イベントのひとつとして企画された「スイス現代美術展 リアルワールド - 現実世界」は、5人(組)のアーティストの作品を通して、スイス現代美術の最前線を紹介する展覧会です。



シャリヤー・ナシャット 《規制する線》 2005

スイス現代美術展 リアルワールド - 現実世界

2005年(平成17)12月17日(土) - 2006年(平成18)2月26日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

*入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 800(640)円

高・大学生 560(450)円

小・中学生 240(200)円

* ()内は前売り、団体30人以上の料金

